

私の戦時期体験

牧之原市遺族会 久保みつ

戦後 65 年、平成 22 年元旦に 80 歳を迎えました。昭和の激動の時代をなんとか乗り越え、殆ど不自由なく平和に暮らしておりますことは、あの戦争の犠牲となられた多くの方々のお陰で今があると毎日感謝の気持ちを持ち続けております。

年を重ねる毎、戦争時代を体験した人が少なくなり、戦争を知らない人が大部分となりました。二度と再びあんな悲惨な戦争の無い平和が続く事を願いながら、私の記憶をたどり綴ってみました。思い出すと涙が出て思うように筆が進みません。

「兄の入営」

日本男子は、20 歳になると漏れなく受ける適齢徴兵検査に、兄は甲種合格、私が小学校一年生の時でした。農業の合間に、父と兄は小舟を出し漁業もしておりましたが、入営が決まると父一人では船が出せず、親戚の家に船を譲り「この船とも暫く別れるだな」と記念写真を撮り別れを惜しみました。父母、新妻（兄の嫁）、4 人の妹、4 ヶ月の末っ子の弟を残して昭和 12 年 1 月 10 日、現役兵として、豊橋歩兵十八連隊に入隊することになりました。

当日早朝、入営の昇り旗を立て、区長さん始め大勢の方々のお見送りで相良駅まで行列して歩いて行きました。お見送りの皆様に挨拶「日本男子として誇りを持って軍務に励んで来ます。」と、あの凛々しい敬礼の姿、今でも脳裏に焼き付いています。長男である兄は、私たち姉妹の頭をなでながら、「勉強しっかりやれよ。家の手伝いも頼むな」と言って汽車に乗りました。私たちは皆、軍の任務を終えて 2 年か 3 年で除隊する事と思っていたので、これが最後の別れになるとは夢にも思っていませんでした。

「支那事変勃発」

兄は、4 月 10 日第一期教育終了の時、上等兵候補を命ぜられ抜群の成績をもって一等兵に進級するという頑張りでした。

昭和 12 年 7 月 7 日北京郊外において盧溝橋爆破事件。支那事変（日中戦争）が始まったのです。8 月 14 日、十八連隊に動員令が下り、兄は石井部隊飯田隊中村小隊に編入。27 日に豊橋を出発するので、家族との面会が許されたとの連絡が入り、母は急いで千人針と白い綿布を酢で煮て乾かしたものを用意して豊橋の連隊に、父母は、新妻と長女の姉を連れて面会に行きました。隊長の「此の部隊で生きて帰れるのは数 10 名あればよいが」との話を耳にした母は、思った以上の激戦だと改めて知らされ、いてもたってもいられない気持ちで、そ

の日から「お明神様」にお百度参りを始めました。次女の姉も母について行きました。

いよいよ豊橋出発の日「今、米原を通過中」と私達姉妹に宛てた葉書が届きました。やっぱり相良駅出発の時と同じ「なかもみつもしっかり勉強やれよ。家の手伝いも頼むな」の走り書きでした。父は胃弱だったし、幼い姉妹、弟、家族の事が余程心配だったのでしょう。9月3日「上海に着いた」と家にも最後の手紙が届きました。勿論、新妻の姉さんにも届いたと聞いています。「此の手紙の着く頃は俺の命もないだろう」と…お国のため命を捧げる事を御奉公としていたのです。

「兄戦死、階級」

9月3日、上海 虬江馬頭きゅうこうばとうに敵前上陸、小隊長の伝令となり、軍工路大奪取戦中、不幸敵弾の為、胸部貫通、9月6日午前8時7分、虬江馬頭西方軍工路東方地区に於いて戦死。享年22歳、と平田寺墓地の石碑にあります。

時代が時代だったので仕方ないことですが、「お国のために名誉の戦死おめでとうございます」と挨拶されました。私たち家族は死んだのにおめでとうと言われて、何とも言いようのない思いをしました。

「漢口陥落」「南京陥落」の度に万歳、万歳の提灯行列がありました。本来なら行列に参加するのですが、私たち家族は外にも出ず木戸を閉じ、仏壇の前で母が泣いている姿を見て、子供心にどうしてよいかわからず一緒に泣きました。

靖国神社にも合祀され、金鷄勲章もいただき、「二階級特進」でしたが、現役兵で上等兵候補を寸前にして戦死、二階級上がっても上等兵です。上等兵候補になるには、よほど優秀でなければいけないことを知った母は、良く頑張ったのにと母の嘆きでした。ある時、「御上からお金が下るのでいいね」と言う人もいました。この時ばかりは「お金なんかいらぬ息子を帰して欲しい」と号泣しました。私たちも母と同じ気持ちでした。お国のために散ったのに、人の命よりお金の方がいいのかと憤りを感じました。

「軍国の母」

家では涙も出し、嘆きも何度か聞きましたが、人前ではめそめそしない気丈さを見せ、軍国の母そのものでした。私は、長男が、孫が、20歳になった時、何時も思いました。頼みの我が子を死を覚悟の戦場に出す母の気持ち、私には到底出来ないと思いました。今でも友人が話の端々に「貴女のお母さんは軍国の母でしたね」と言ってくれます。

「大東亜戦争」

昭和 16 年 12 月 8 日大東亜戦争が始まり、現役兵は勿論、軍隊を除隊した者、一家の柱である妻子のある者、召集令状が来ると容赦なく戦場に行きました。家族、妻子、老いた両親は泣きの涙で無事を祈りながら送り出しました。青年達は義勇軍に満蒙開拓団、女子は花嫁開拓団として、一途にお国のため国策にそって大陸に送り込まれました。内地に残った女子は、挺身隊といって軍需工場に行き、私達学生は戦地の兵隊さんに慰問の手紙や慰問袋を送ったり、男手のない留守宅に勤労奉仕に行き農作業も手伝いました。戦争が激しくなり、勉強どころではありません。

体操の時間は、分列行進、消火訓練のバケツリレー、竹槍訓練でした。物資の不足で帳面もなく、書き方の時間は新聞紙に『米英撃滅』『一億一身火の玉だ』などを書きました。靴もなく藁草履をつくって通学です。「欲しがりません勝つまでは」の合い言葉で、不平不満を言う人はいませんでした。

女学校に進んだ人達も学徒動員で軍需工場に派遣され銃後の守りに一心でした。

「町役場に勤務」

昭和 19 年 4 月より町役場に勤務しました。最初は給仕、電話受付でした。友人は軍事工場で働いているのに、もっとお国のために働きたい、お国のためになりたいという思いの私でした。

食糧難とはいえ、相良はまだまだ都会と違って良い方だったし、安全な所でした。

東京より各お寺に分散して疎開児童が来ました。平田寺には渋谷の富ヶ谷小学校から三年生以上の生徒が 100 名来ました。毎週日曜日になると私が家にいることを知っている疎開児童は「お姉さん」と言っっては遊びに来ました。食べ盛りの子供達、親に甘えたい時期なのに、安全な場所へ避難させた親心でしょうが、今では考えられません。

昭和 19 年 12 月 8 日、東南海地震がありました。学校の窓ガラスは全部破れて土煙が立ちました。子供を迎えに行く父兄で校庭はごった返していました。私は疎開児童が心配でしたが無事でしたので安心しました。しばらくして疎開児童は安全な青森の弘前に移動しました。

B29 が富士山を目標に御前崎上空を通過して、相良が都会に向かう通り道となっていました。何時爆弾を落とされるかわからない状況でした。

牧之原に大井航空隊が出来、予科練習生の手旗信号や飛行体操を小学校校庭

で見学しました。海岸では猛訓練もしていたのですが、軍の事は絶対秘密でした。所々の家に民泊した練習生もありました。

「警報を知らせる重大な役目」

当時の私の仕事は、警察より「何時何分警戒警報発令」の電話を受け、職員に言ってから急いで小学校へ知らせる、小使い室より警戒警報のサイレンを鳴らすのです。数分経ってまた「何時何分空襲警報発令」の電話を受け、小学校に知らせると空襲警報のサイレンが鳴るのです。私は、電話をしてから戸籍係の人と戸籍簿を防空壕に運ぶのです。暫くして「警報解除」の知らせを受け小学校に連絡、警報解除のサイレンが鳴るのです。ほっとして戸籍簿を戻すという有様でした。

ある時こんな事がありました。一日に何回となく警戒警報、空襲警報の繰り返し、私もパニックになり警戒警報を間違えて空襲警報と連絡してしまったのです。「わあーいきなり空襲警報だ」と皆を慌てさせてしまったのです。戸籍簿を防空壕に運びながら空を見上げると B29 が飛行機雲を出しながら通っているではありませんか、間違えたのが幸運にも良かったのです。

「本土空襲」

東京大空襲で逃げ場を失った人が隅田川に飛び込み、大勢の犠牲者が出た事。静岡も焼けている。浜松も…艦砲射撃があって焼けている。しかし、どうすることも出来ません。只々無事を祈るばかりです。明日は我が身かも知れません。毎日が恐怖でした。命が助かった人は家を失い、田舎の実家や親戚に身を寄せていたのです。大家族になった家では何でも分け合って、すいとん、ぞうすい、芋パンなどはありがたい食べ物でした。

戦災者、引揚者、子供の転校届などで役場は大忙し。当時はスパイに知られたら困ると何事も秘密でした。出征兵士も役場で一人付き添って入隊するという静かな出征でした。尊い命を捧げた兵士の遺骨の帰還も淋しいものでした。夜になると燈火管制と言って灯りが外に漏れないように黒い布を電灯の周りにかけました。何時でも警報発令されると、防空壕に入る用意をしていました。軒先には、消火のために大きい桶に水を溜め、バケツ、竹槍などが備えてありました。この頃です。敵機より宣伝ビラがまかれ「早く降伏しろ」というものでした。私達は勝つことだけを信じて頑張っているのです、そんな宣伝ビラには目もくれませんでした。

「近所にも犠牲者が」

終戦間近の7月24日、大江の矢部仙太郎さんのお宅に爆弾が落ち、爆風の

破片で当時 12 歳の千恵ちゃん、10 歳の節ちゃんの幼い姉妹が犠牲になり、長男の茂さんは負傷という大惨事に巻き込まれました。近所の人や母親が付き添い、急いで高田医院に駆けつけ医師の手当てを受けたのですが、不幸にも姉妹は帰らぬ人となりました。このお宅は父仙太郎さんも戦地で、母のきよさんは 6 人の子供を育てながら農作業をして留守宅を守っていました。千恵ちゃん、節ちゃんは、母を助け弟達のお守りや食事の支度も行っていた仲の良い姉妹でした。二人の子供を亡くされたきよさんの心中を思うと、身の裂ける思いをしました。あと 20 日早く終戦だったら、この子達は犠牲にならなかったのにと悔やまずにはられません。

平田寺にある大江区戦死者の碑に二人の名前も刻まれています。私はお墓に行く度にこの碑に立ち寄って、兄をも偲びながら、戦死者の方々の名前に目を通し、千恵ちゃん、節ちゃんの名前を撫でながら、手を合わせご冥福をお祈りしています。

数々の体験、ここに書きつくせません。私の戦時期の一コマです。

戦争を繰り返してはならないことを語り継いで行くことが、生きている者の使命です。後世に少しでもこの思いが伝われば幸いです。

(平成 22 年 8 月牧之原市教育委員会発行の「後世に伝えたい牧之原市のはなし」より)